

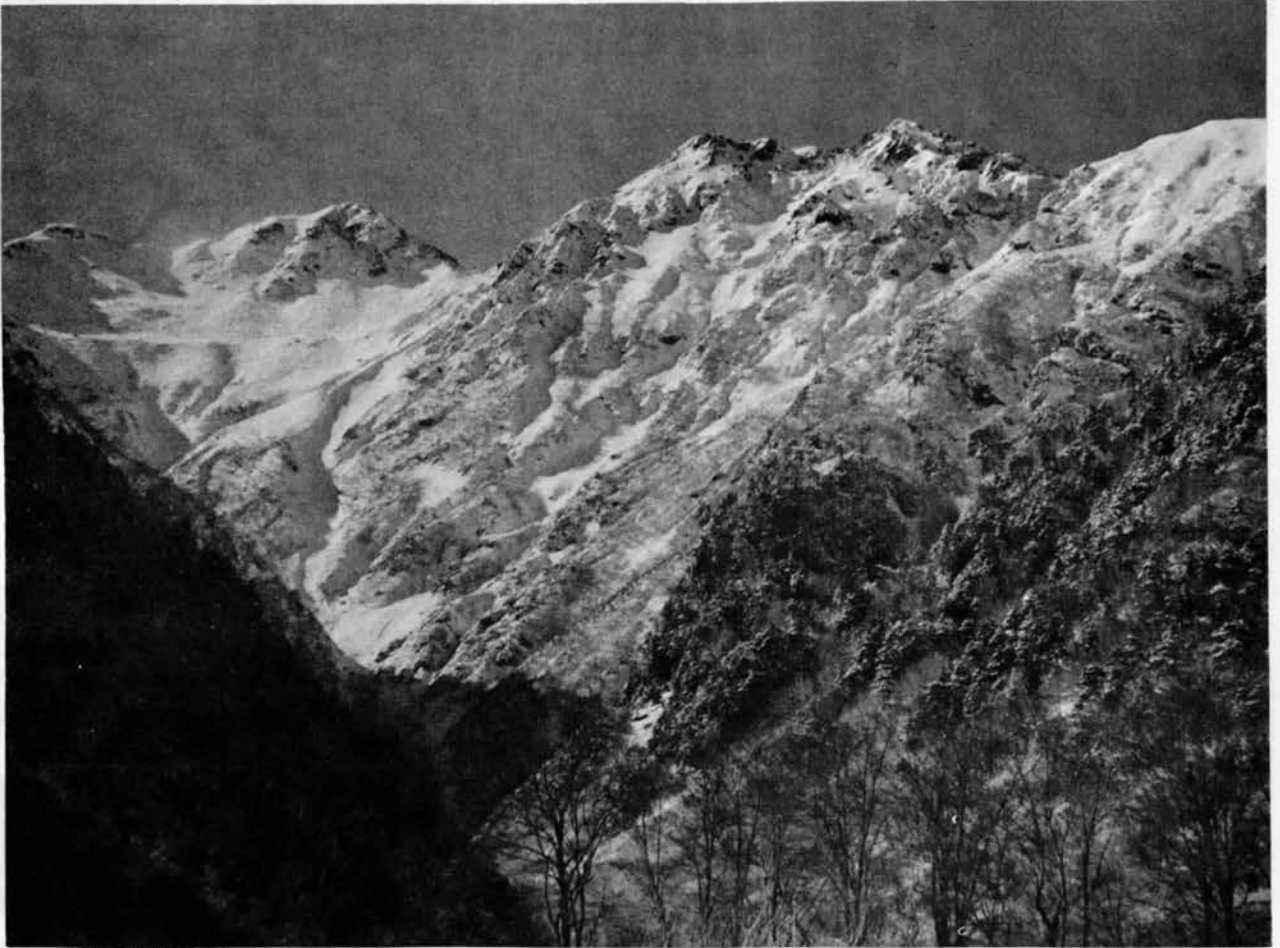
山と博物館

第15巻

第11号

1970年11月25日

大町山岳博物館



新雪にかかやく針ノ木岳(左)とスバリ岳(右)

撮影(11月下旬)内山慎三

国ざかい

国ざかいとは不思議なものである。佐々成政が針ノ木越えの伝説を残した戦国の頃、針ノ木岳やスバリ岳の尾根を結ぶ北アルプスの山並みは、自然の要害としてそのまま一國の防衛線の役目をはたし、なんとなく国ざかいらしい地域が出来上がる。そして、それらの地域は時の領主の力関係や軍事あるいは経済上の欲求のもとに、ある時は拡大され、またある時には縮小されながら、次第に固定した国境線として確立して行く。

戦国時代に続く江戸幕府の封建社会は、この国ざかいをそのまま受け継ぎ、文明開化とうたわれ、明治新政府でも、県境と名前を改めただけで、それをほとんど踏襲したまま今日に至っている。

交通機関や経済交流・情報交換など、文明と言われるすべてのものが飛躍的に発展した現在、この封建社会の遺物としての国ざかいは、有効に機能をはたしているのだろうか。

たとえば、山梨県と長野県の県境にあたる南アルプス北部の北沢峠付近に見られる様に、国有地として国家が直接管理している山岳地帯でも、県境となつて尾根を境に、山梨側の森林は山頂近くまで切り倒されて丸裸となり、どうした理由か知らないが、林道の開設が遅れた長野県側では伐採が進まないまま緑の斜面が広がっている。

この傾向は森林伐採に限ったことではない。観光開発と称して進められる無差別的な自然破壊行為にあつても、県境の両側で極端に違った現象を現わしている例は、国立公園内のいたる所で見いだされる。また、おかしなことに片側で何かが始まるともう片側は乗り遅れじとばかりにハッスルしその行為はますますエスカレートする。

緑の植生は人間の生活環境を守る防衛線であると言え言われる。自然景観保護地域としての国立公園にありながら、気候・地形・地質・動植物など自然の姿を全体的にとらえる努力もせず、県境という人為的なラインに固執して行政を進める、時の領主(?)の思わくやゴツゴウ主義だけで自然をほいままにして良いものだろうか。

(山猿)

黒部奥山廻りと信州

広瀬 誠



針ノ木岳と針ノ木雪渓

太閤記や泉達録の伝説的記事によれば、山を越えて八・九軒、家のある村里にたどりつき村人を驚かしたという。この山ろくの村里というのは野口村あたりをさしているのである。

立山山ろくの芦峠あしくろは北アルプスのシエルハ村といわれるが、この芦峠こそは千年の昔から立山信仰を渡り伝えて来た宗教村落である。この村に伝わる古文書は特製の二重箱に収めて施錠され、その箱をまた麻製の網袋に入れて保管されている。いざという時はこの網袋ごと担いで持ち出すためである。この古文書を見せたらうには、村の責任者三名の承認と立ち会いがなければ許可されぬといったぐあい、万手厳重に保管されて来たものである。

この古文書の中に、永禄年中(一五五八―七〇)越中の武持寺島職定が芦峠へあてた書状がある。それには「商人どもが信州へ越境するのを厳重にとりしまれ」といった意味のことが書かれている。この一通の書状は、戦国の昔、芦峠から立山を山越えして信州と往來した商人たちの存在をまざまざと物語っている。それらの山間通行者の中に、商人をよ

そおって、ひそかに信越間を往來暗躍しスパイ活動をつづけていた忍びの者があつたのであろう。それだからこそ職定はいっさいの商人の通行を禁じ、スパイ活動を終息させようとしたのである。これらの山間通行者の利用した道筋は俗にざらざら越えと呼ばれ、立山を越えて黒部川を渡り針ノ木峠を越え信州野口村に出るコースであつた。ヒマラヤの大峡谷にも、細々と道が刻まれ、釣橋がかげられ、塩を運ぶルートが、山を越え谷を越えてつづいているが、ここでも、塩や塩魚が越中から信州へ、峡谷峻岳を越えて運ばれていたのである。この間道を積極的に利用したのが佐々成政であつた。天正十二年(一五八四)の成政のざらざら越えについては確実な史料がなく、事件は伝説の霧に包まれているが、時日に多少の検討の余地はあつても、とにかく信越国境を越えたことは史実だ。

も「このところ昔佐々内蔵助落ちし時越えし処なり、今さらさら越え」と書き入れがされていて、信州側にも語り伝えられていたことが明らかである。大出の西正院の姥尊像にも、成政が持つて来たものだという伝説が附会されている。立山登拝者はまず芦峠の姥堂に参詣して行くならわしであつた。大出の姥尊は、芦峠の立山表口に対して、信州に立山裏登山口があつた事実を示すものである。信州側立山登山道の実情は百井塘雨の「笈埃随筆」にも書き記されている。

このようにして、越中芦峠村と信州野口村とを結ぶふしぎな山中の抜け道が、戦国の昔から細々と息づいていたのである。

△ △ △

天正十三年、成政は力尽きて秀吉に降参し十五年には成政は肥後国へ移され越中新川郡はあけて前田氏の領地となつたしかし前田氏にとつて気味が悪かつたのは、立山の裏に秘密の抜け道があることであつた。宿敵佐々がその間道を利用してゐたという事実はいつそう前田氏(加賀藩)の神経をとがらせた。

そこで前田氏は黒部奥山おしり一帯を御嶽山(立入禁止区域)とし、芦峠の者にその監視を命じた。立山信仰登山の道は許されたが、定められたコース以外を歩くことは、厳しい法度とされた。

慶安元年(一六四八)藩主前田利常は、芦峠の三左衛門・十三郎を小松城に呼び出し、「佐々成政が通つたというざらざら越えから信州までの道筋を实地調査させるため、奉行三名派遣するから、おまえたち父子はその案内をせよ」と命じ、鉄砲を与えた。この時一



山廻り役宅 浮田家(富山市太田本郷)

広瀬誠撮影

行は針ノ木峠を越えて信州野口村領馬留まで足をのばし、つぶさに調査している。繩を用いて道のりもくわしく実測したという。

その後藩は毎年奥山廻りという役名の監視員を出して山中を巡察させた。奥山廻りは一定の家柄から選任された。富山市郊外の太田本郷には現存するただ一つの山廻り役宅がある。浮田家といつて、多年、奥山廻りの苦しい勤めを果たして来た家柄でその建築は富山県指定文化財である。広い庭には熊笹が茂り野ウサギが生息し、池には水芭蕉が茂っている。いかにも奥山廻りにふさわしい住まいである。

奥山廻りは毎年、夏から秋のはじめにかけて、人足にナベやカマや食糧を担がせて出かけた。人足の数ははじめ八名ぐらいいり、後に強化されて三十名ぐらいいりになり、見まわりの日数もはじめは十五日ぐらいいりだつたのが、二十五日ぐらいいりになっている。人足には誓紙を書かせ、黒部奥山での見聞はいっさい秘密として親兄弟にも洩らさぬよう固く誓わせた。

奥山をまわるコースは、上奥山・下奥山の両コースがあつた。上奥山といふのは、立山から黒部川を渡り、針ノ木峠にのぼつて、鷲羽岳までの国境山稜をめぐる、薬師岳・有峯を経てもどつてくるのであつた。(その逆コースをとつたこともあつた。)下奥山といふ



のは、境川水源の山々をさぐり、小川温泉から黒雉の谷に入り、大蓮華(白馬)・祖母谷方面をめぐって行くコースで、時には東谷から五竜・鹿島槍まで足をのびした。

上奥山コースの第一の眼目は、なんといつても針ノ木峠であった。コースは年によって多少の変更はあったが、必ずこの峠には登って加賀藩領の制札を立てるのを例とした。

奥山廻りの任務ははじめは軍事的意味もあつたらう。しかし天下太平がつづき、もはや軍隊の侵入もスバイの暗躍も心配の必要がなくなつた。むしろ、山中で信州人の材木伐採や狩猟・漁猟を見つけ、これに神経をとがらせた。「ここは越中。加賀藩領である。信州人の立ち入りは許さぬ。まして盗伐盗猟など断じて許さぬぞ」というのが奥山廻りたちの信条であつた。

針ノ木谷ではしばしば信州人の伐採小屋が発見された。伐採業者はいちはやく逃げてしまふ。奥山廻り役は伐採材木を没収し、小屋は二度と使用されぬよう焼き払う。黒部川べりの岩魚釣りは叱られて追ひ出された。こんなことが毎年のようにくりかえされたのであつた。

ところで信州人の考えかたはどうであつたらう。奥山廻りが発見した盗伐小屋のそばに石が立ててあつて、それには墨くろくろくと「野口山」と書いてあつたという。野口村領の山の意である。つまり信州人にとっては黒部奥山は信州の一部と考えられていたのであつたらう。加賀藩の立ち場からは「盗伐」であつたらう。信州人の立ち場からは「盗伐」であつたのだらう。奥山廻りはこの石標を「砂みがき」にして消したという。ゴシゴシ砂をこすりつけて抹消したのである。

そして針ノ木峠には、かねて用意の木札を立てた。一例を示すと、札の表には「加州境目見分」「山廻り役 竹内甚之進、浮田惣八郎」、裏には「慶応元年乙丑七月吉祥日」「井二平柚五百人召連登山之事」と書かれていた。実際には三十人ぐらしか登つていないのに「五百人」とは信州人をおどすためで、まことにコッケイな誇張であるが、なんとかして盗伐を防ごうという山廻り役の真剣な気持ちがいじらしくもあつたのである。

こんな札が一枚でも残つていたら、それこそ貴重な史料として大町山岳博物館の一室に陳列しておきたいところだが、全然残つていないところを見ると信州人たちが引っこ抜いて焚き火にでもしてしまつたのである。

盗伐材木は没収したが、これを越中側へ運びおろすことはとてもできない相談である。

やむをえず、信州の材木業者に払い下げていくが、足もとを見て、安く買いたたかれていく。安永四年(一七七五)には野口村の西沢九郎七が払い下げを受けているが、結局は「盗伐業者のもとしめ」が買い取つていくわけだ、双方とも腹の中ではおかしかつたらう。

盗伐業者の逃げ足は早かつた。山廻りに逮捕されたのは安永四年の高根新田村(山と博)編集部註、おそらく高根新田村のことであらう(の三吉で、この事件にちなんで盗伐ルートが三吉道、その小屋場が三吉小屋場、伐採していた谷が三吉谷と呼ばれるようになった三吉はいわば信州柚の代表としてその名を長く黒部山中にとどめたわけである。

黒部山中の名木はネズであるが、ネズのことを信州ではクロベという。黒部奥山の木だからこんな名になつたであらう。名はおのずからその出もとを語つているのである。

ところで、奥山廻りの任務は盗伐とりしまりだけではなかつた。「米(雷)鳥・花・松」など書いた古記録が芦峠に残された方針であつた。それが加賀藩の終始一貫した方針であつた。鳥の保護は加賀藩の終始一貫した方針であつた。それが加賀藩の終始一貫した方針であつた。鳥の保護は加賀藩の終始一貫した方針であつた。鳥の保護は加賀藩の終始一貫した方針であつた。

奥山廻りには俳諧をたしなみ風雅を解する者があつて、山中で句会を開いた記録もあるが、滑川の桐沢半六もその一人で、山廻り日記中、しばしば俳句を書きつけている。黒部川を渡渉するとき、

手を組みてふんばり越ゆる秋の川
とよみ、山の飯小屋で

夜寒かな手足かがめてこもの下
と訴え、寒夜の槍が岳を遠望して、
夜寒ほど空に乗るかな鐘ヶ嶽
と歌う。寒気きびしいほど、くつきりと空に
冴えて見えることをいつたのであろう。また
眼下に信濃路を見おろして、
信濃路や調ここのふそばの中日和(ひより)



西正院の大姥尊(大町市大字平大出) 上条為人撮影

眼の下に豎道ながしそばの花
と詠じている。後立山の縦走路からソバ畑まで見えたかどうか疑問だが、山廻りの心の目にはありありと浮かんだのであろう。越中古地図の一つに「針ノ木北又へノボレバ信州ノ人家ミユル」と書き入れたものがある。この短い語に、人家に対するなつかしさがあふれている。山廻りも人の子である。長い山旅をつづけ、人里恋しさがこみあげてきたのであろう。

黒部山中の森林資源については、土屋義休も「この山、城下へ遠し、故に他領のごとく成りゆくこと、惜しむべきかな」(享保二十一年、一七三六)と歎じた。しかし加賀藩はいつまでも指をくわえて見てはいなかつた。天保九年(一八三八)には藩は自力で黒部奥山伐採事業をおこし、針ノ木谷などに伐採小屋十一棟を建てて大々的に伐採した。伐り出した材木は「針ノ木峠裏」へ運びおろし、箆川谷の中小屋を中継基地として信濃路へ搬出したのである。もちろん他領を使用するのであるから、前もって渡りをつけねばならぬ。加賀藩の名越彦右衛門が信州へ出張して松本藩との間に談合をすませ、国境線についても

(次頁へつづく)

ライチヨウを育てる (その二)

海川庄 一

一九六八年の秋、現地育成の後爺が岳から下ろされた二家族のライチヨウは雌親二羽、若雄四羽、若雌四羽、計一〇羽という構成でした。このうち、一九六九年一月二十三日にコクシジウム症で一方の雌親を、また五月二日に原因不明の黄色下痢で一羽の若雌を失ったため、一九六九年の飼育繁殖は残った八羽で四組の番いを構成して進められました。

飼育繁殖の成功

待望の人工気候室の建設は設計も出来て、いよいよ施工の段階を迎えていました。しかし、予算の都合で工事は二年間に分割されたため、またも冷房施設のないまま、繁殖の季節を迎えることとなりました。

1 ツガイ形成と産卵

三月に入ると、雄は闘争性が強くなり、赤い肉冠を開いてガ・ガツと鳴き立て、飼育者に対してすらキン舎への侵入をこぼも傾向が出てきました。こうした発情の徴であるナワバリ防衛の習性が発現してきた雄に対し、換羽が進行し産卵期が近づいたとみられる雌を順次配してツガイを人為的に作りました。



假親のチャボ(左)と育ったライチヨウ(右)
1969・8・30(70日台)撮影

交尾は早い例では四月下旬(ソメイヨシノの開花日と一致)から認められました。

キン舎内はできるだけ自然の状態に似せるため、中央部にアカマツの枝を横に這ったように置いてやりました。雌鳥はこのアカマツの枝の下の地面に親子どんぶり程の大きさの穴を掘り、翌日この巣穴の中に最初の卵を産みました。卵の下には巣材は何も入っていませんが、卵を産み終ると中腰の姿勢で一歩前進し、近くにある枯葉を口にくわえて尾羽根の後ろの巣の上に投げます。こうした動作を何十回となく繰り返す、枯葉で卵を完全にかくしてから巣を離れます。翌日、産み足しをする時には、前日かけた枯葉をいねいに取り除いてから産卵し、再び枯葉をかけます。(枯葉は抱卵時に卵の下に敷く)キン舎へ人が接近すると、雌親は意識的に巣から遠ざかり別の場所の枝蔭に坐ったりして人の注意を巣からは神経質になっていきますから、安静な環境を与えることが何より大切です。

産卵はときに休む日はあっても毎日のように続けられ、四羽の雌から合計四九〇の卵が得られました。野生の場合の二倍も数多く産んだわけです。

例えば五月一八日に初卵を産んだ一羽の雌の場合、五月二九日までに九卵を産んでなお抱かないので五月三〇日に二卵を残して七卵を採取し、採取した卵はその日からチャボに抱かせました。しかし、六月一日からまた産卵が続き六月一日に第一五卵を産んで翌日から抱卵に入っております。

2 抱卵と孵化

第二の雌の場合はケージがカモシカ園内の安静な場所にあつたためか九卵を産下ののち直ちに抱卵に入りましたが、第三の雌は一〇卵産んで巣を捨ててしまったため、七卵を子

ヤボに三卵を孵卵器にあづける結果となり、また、第四の雌の場合にも一五卵中前半に産下された八卵をチャボに抱かせることになりました。このように飼育下ではライチヨウを巣に坐らせることは必ずしも容易ではありません。抱卵の条件としては①人・犬・猫などが接近しない安静な環境を与えること、②外から抱卵中の雌が見えにくいようマツの枝などを適当に配置すること、③ケージはゆるい傾斜地に設け、谷方向の見張りを良くし、出入口を谷方向につけること、④地面は適当に湿っており、強い直射が巣に当たらないこと、⑤ケージ内には営巣場所から離れた位置に一方以上の雌のかくれ場所となるマツの枝などがあること、などです。

雌親鳥による抱卵は三巣で二〇卵、このうち孵出したもの一五卵、平均孵化率七五%。チャボによる抱卵は四腹で二四卵、孵出一五卵、平均孵化率六二・五%。孵卵器によるもの四卵、うち孵出一卵、孵化率二五%、他に事故による破損一卵という成績でした。母鳥による孵化の成績が最も良かったわけですがこれは主として、新鮮卵を抱いたためと思われまふ。

3 一羽だけ育つ

全部で三二羽の雌が出たのですが、最初に抱かせたチャボの場合だけが餌付けに成功、他はすべて孵化後一〇日以内に死亡しました。多くの雌は日令二六日で落命してしまふ。餌付け段階で死亡した最大の原因は雛そのものが弱小であったことと、天候が悪く長雨が続いたことにあるとみられます。雛がなぜ弱かったかということが最大の問題となります。が、卵が自然のものよりも二割方軽小であった点、産卵数が二倍にもなった点などを考えると、産卵期の栄養と産卵期から抱卵期へかけての気候条件が根本的原因とみられます。

餌付けに成功した母鳥育雛による雛は四〇日令までに夏の暑さがわざわざいして五羽が死亡、その後厚沢へ移した一羽の雛だけが育ちました。ライチヨウ飼育七年にして、ようやく初の飼育下繁殖に成功したわけです。

以下次号(山岳博物館学芸員)

(前頁より)

意見の一致にこぎつけている。領地利用の代償として、加賀藩から信州へ塩を出荷することになり、そのまたお札として松本藩から加賀藩へ綿を贈り物にするという、なごやかな一場面もあった。

しかし、加賀藩の伐採材木がどしどし麓川谷から大町・松本へ運び出されるのを見て、信州の柚木たちはどんな気持ちだったことだろう自分たちが汗みどろになって切り開いた林道が、そっくり加賀藩の利用するところとなったのである。「お株をとられた」とはまさにこのことであろう。

一方、越中の農民は不穏であった。黒部奥山を伐採すると、山が荒れ、天候不順となり田畑が不作になるといふ根強い迷信があったからである。藩は住民の不満をなだめ、不安を取り除くため、伐採事業を一時中止して、立山で祈願祭を行なつたくらいである。またこの事業の奉行であった名越彦右衛門はふとしたことから失脚している。

しかし黒部奥山は伐採せず、開発せず、自然のままに保護すべきところである。「根強い迷信」は大きな目で見れば、かえって真実である。無理な産業開発が自然のパラソスを破壊し、種々の公害をひき起こすことは、最近われわれの手痛いまでに経験したところである。現在この奥山が国有林・国立公園として保護されていることを私はうれしく思う。そして、奥山廻りと信州柚の角逐、加賀藩営伐林事業、成政さらさら越えなどの遠い歴史をかえりみつつ、この雄大な国境山稜・幽深な大峽谷を心ゆくまで味わうことの幸福を思うのである。

(富山県立図書館)

山と博物館第15巻第11号
一九七〇年十一月二十五日発行
発行所 長野県大町市E.L.④〇二一
印刷所 大町市大町山岳博物館
大町市大町山岳博物館
大町市大町山岳博物館
定価 年額三〇〇円(送料共)(切手不可)